

# 関東における中世集落の再編

## —15世紀代の画期を中心として—

永越 信吾

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本歴史研究専攻

はじめに

1. 関東における集村的集落の形成
2. 15世紀後半に成立する集落

3. 15世紀代の集落再編の背景

4. 村落社会構造の変質と地域社会へ与えた影響  
まとめ

はじめに

中世集落に関する考古学研究は、1970年代から1980年代にかけて畿内を中心とする地域で開始された（橋本 1974; 広瀬 1986等）。それらは、建物の規模や棟数に視点を置いたもので、集落居住者の階層を分析するための重要性は今日も変わりはない。

関東では、1990年代以降各都県で研究が進められ、それぞれの地域における見解が提示されている（市川 1992; 大塚 1992; 斎藤・新藤 1995; 笹生 1999; 櫻井 2003; 築瀬 2004; 渋谷 2010等）。

このうち、笹生衛氏は、房総の中世集落を考察し、14世紀後半から15世紀前半、15世紀後半の二時期を画期とする見方をしている。前者は、農業生産の向上、物流の活発化を背景として、道沿いに形成される集落、居住地が集合する集落、大型化した居館を中核とする集落といった新たな村落の出現とするものである。後者は、居館を中心とする集落の消滅と戦国大名等の権力の支配拠点の城郭と城下宿、新たな交通路の街路集落形成を指摘している。特に、14世紀後半の画期を大きな変化期と捉えている。櫻井敦

史氏も房総における中世集落の推移を検討し、室町から戦国前期に生業の多様化とそれに伴う余剰物の蓄積を挙げ、15世紀中葉に画期を置いている。このような、地域の中で集落遺跡の様相変化を読み取り、画期を導き出す方法には一定の意義が認められる。

ただし、画期及び地域性から考察する場合、中世集落の分析には次の二点で留意が必要と考える。まず、第一に画期の要因に農業を主軸とする生業の発展的展開を求める点については、再考の余地があると考えられる。近年の中世の気候変動に関する研究によれば、12世紀から16世紀代前半には海水面が現在のより最大で2m前後低くなったパリア海退の時期で、気候の冷涼化現象が生じたとされる（磯貝 2002）。中世に頻発する飢饉も気候変動が起因していると考えられる。このような環境の中で、果たして発展的な生産力上昇が可能であったか、今一度考えてみる必要があるだろう。画期の背景は、生業発展論とは別の要因があるように思われる。二点目として、地域に即した研究という点では、意味がある<sup>1)</sup>が、その一方で、もっと広域の関東を俯瞰的に

見据えた研究が欠如しているように思われる。それは、地域的に見出された画期が関東の中で普遍性を持つものなのか、あるいはその地域に限られたものであるのかが見えてこないからである。

そこで、関東各地の集落遺跡の消長や、集落遺跡における建物跡群あるいは居住区画のあり方から、集落の構造を考えていく。なお、次章以降、分析対象として取り上げるのは、主に農村と捉えられる集落遺跡である(図1)。集落遺跡の中には、物流中継地として宿や市としての性格が考えられるものもあり(笹生 1999; 築瀬 2004等)、集落の性格は一様ではない。こうした多様性を考慮した上での考察は必要ではあるが、本稿では画期を考えていく上で、まずは農業経営を主体とする集落を検討することから試みることにしたい。

文献史学の研究では、畿内とその近国で鎌倉時代後期から室町時代にかけて、村落共同体といえる惣村が発生するとされる。惣村とは、村が一つの完結体であって、居住する農民層の独

立的小経営及び農民層と村落の不可分的結合、村落が田畑、山林等の再生産の不動産を有し、灌漑用水を整備する。さらに、農民の手による年貢上納として地下請、村の法規制とそれに反した者に対する処罰である検断がその指標として挙げられる(石田 1963)。中世後期に、新たな村・町の成立を指摘する勝俣鎮夫氏は、自立のかつ自治的性格を持つ村について、地下請(村請)の社会的承認を重視している(勝俣 1985)。

さらに、このような自立の村落の存在を、関東にも認める見解が出てきている(池上 1999)。それは、中世から近世へ移行する15世紀後半から17世紀前半における東国村落に自立の主体性と絡めた研究(黒田 2006等)へと展開するに至っている。15世紀後半から16世紀代にかけての戦国期、関東においても村が主体性を持つ存在となっていたのである。故に、この時期は、村落構造の変化期とも言え、社会の根底での変動が考えられる。

本稿では、こうした文献史研究の成果も参考にしながら、集落遺跡を対象とした考古学的視

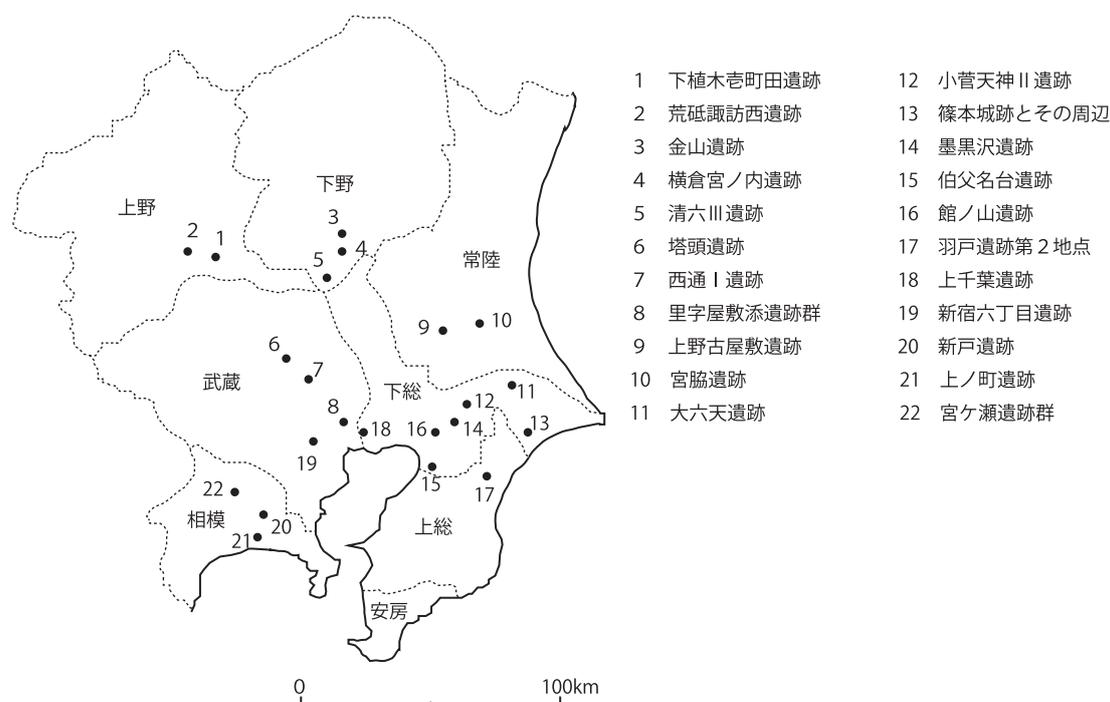


図1 集落遺跡の位置

点から、関東の中世集落の姿を分析することにした<sup>2)</sup>。今回は画期要因の検討を主たる目的とするが、集落遺跡の研究には、屋敷地<sup>3)</sup>内の諸遺構から集落の全体像を明らかにしていくこと、出土遺物についての分析も重要であり、本稿は今後そうした研究を進めるための予察としたい。

### 1. 関東における集村的集落の形成

関東では、13世紀後半から14世紀にかけて、複数の居住区画が集合する集落がみられるようになる。まずは、この時期の集落からみていくことにしたい。

13世紀後半に成立する新戸遺跡（神奈川県相模原市）は、の河岸段丘上に立地し、159棟の掘立柱建物跡が8箇所集中する（神奈川県立埋蔵

文化財センター 1988）（図3）。中央よりやや北側でL字状の溝がある他は、建物跡群間の境界を示すような溝や柵列は見出せない。L字状の溝は、西方が調査区外であるため、これが方形の区画になるのかは定かではないが、検出範囲で見ると、溝の東西、南北を明瞭に区分しており、方形居館的な区画であった可能性も考慮しうる。掘立柱建物跡の規模は50m<sup>2</sup>を超えるものは少なく、多くは20～30m<sup>2</sup>台である。一部の建物跡群で50m<sup>2</sup>台規模の建物跡がある他は、建物規模には大差はない（表1）。新戸遺跡は15世紀前葉には廃絶する。集落の盛期は14世紀代にあるとみられ、この時期に区画は未発達ながらも、集村的な集落が成立していることが、この遺跡の事例から知れる。

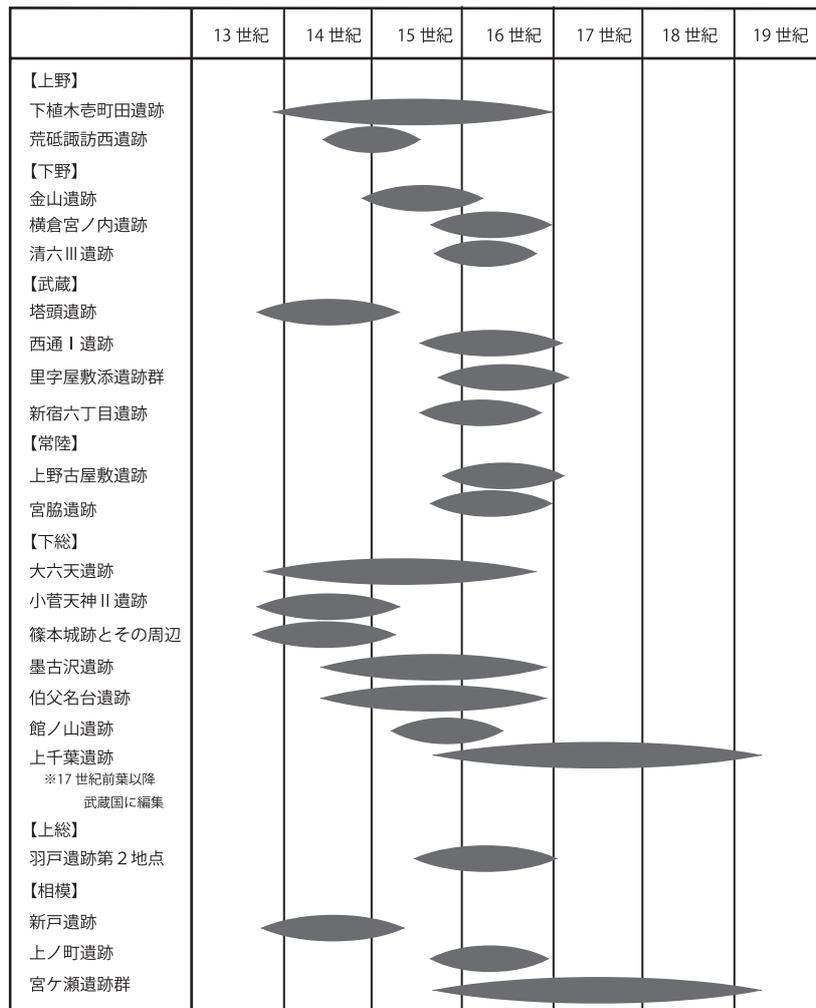


図2 関東の主な集落遺跡の消長

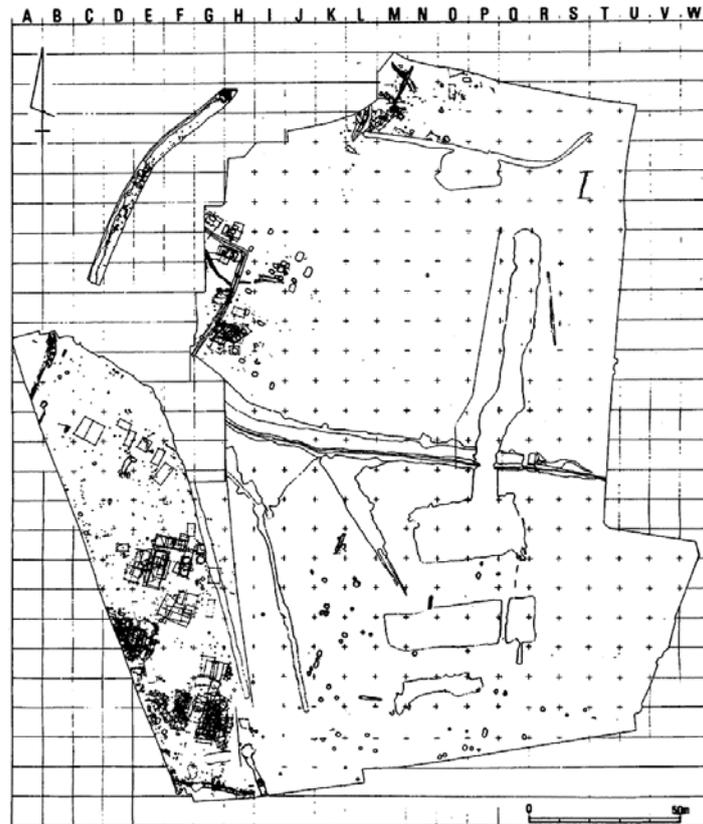


図3 新戸遺跡

新戸遺跡の場合、L字状の溝が居館か否かは、はっきりしないが、下植木壺町田遺跡（群馬県伊勢崎市）では、調査範囲南部で居館と考えられる区画がみられる（財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999）（図4）。居館の東から北側に建物跡群が集中し、居館を中心とした集落の姿をみることができる。

このような居館を中心とする集落の様相が、より明確に把握できるのが篠本城跡（千葉県横芝光町）である。篠本城跡は樹枝状に開析され半島状に延びた台地の先端部に立地し、14世紀後半までに形作られた複数の郭から成る城館と冠される遺跡であるが、主郭とされるやや面積の広い郭を居館（図5区画9）（表2）とし、その周囲のおよそ10の区画の屋敷地がある（財団法人東総文化財センター 2000）（図5）。15世紀前半頃に居住地としての機能はなくなる。その周囲の台地上に立地する神山谷遺跡（財団法人東総文化財センター 2002a）、新谷遺跡（財団法人東

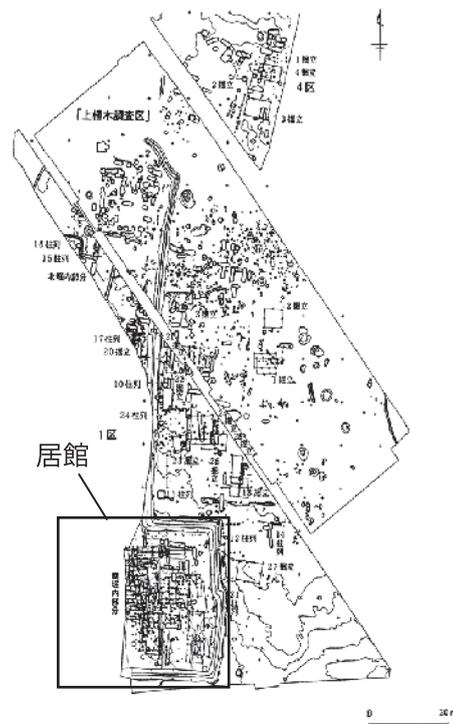


図4 下植木壺町田遺跡

表1 各遺跡の建物跡規模

面積 (m <sup>2</sup> )	棟数
0 ~ 10.0	59
10.1 ~ 20.0	72
20.1 ~ 30.0	17
30.1 ~ 40.0	1
40.1 ~ 50.0	1
50.1 ~ 60.0	2

新戸遺跡

面積 (m <sup>2</sup> )	北部区画	南部区画	南西部区画
0 ~ 10.0			1
10.1 ~ 20.0	5		3
20.1 ~ 30.0	2	6	1
30.1 ~ 40.0		1	
40.1 ~ 50.0	2	1	
50.1 ~ 60.0			
60.1 ~ 70.0			
70.1 ~ 80.0			
80.1 ~ 90.0			
90.1 ~ 100.0	1		

小菅天神II遺跡

面積 (m <sup>2</sup> )	区画1	区画3	区画4	区画5	区画6	区画7
0 ~ 10.0		4	2	1	1	
10.1 ~ 20.0	2	1	1		1	
20.1 ~ 30.0	1					
30.1 ~ 40.0	1		1	1		1
40.1 ~ 50.0			1			1
50.1 ~ 60.0						1
60.1 ~ 70.0					2	
70.1 ~ 80.0			1	1		
80.1 ~ 90.0						
90.1 ~ 100.0						1
	区画8	区画9	区画10	区画11	区画13	
0 ~ 10.0		1	2	1	1	
10.1 ~ 20.0	1	1	1	1	4	
20.1 ~ 30.0	1	2		1		
30.1 ~ 40.0	3				2	
40.1 ~ 50.0		1				
50.1 ~ 60.0						
60.1 ~ 70.0		2				
70.1 ~ 80.0		1				
80.1 ~ 90.0						
90.1 ~ 100.0						

篠本城跡

面積 (m <sup>2</sup> )	棟数
0 ~ 10.0	11
10.1 ~ 20.0	27
20.1 ~ 30.0	21
30.1 ~ 40.0	3
40.1 ~ 50.0	2

上野古屋敷遺跡

面積 (m <sup>2</sup> )	第1区画	第2区画	第3区画
0 ~ 10.0	1		3
10.1 ~ 20.0	4	3	1
20.1 ~ 30.0	2		

伯父名台遺跡

※面積不明のものは除外している。

※新戸遺跡と上野古屋敷遺跡は中世に比定される建物を一括している。

表2 各遺跡の区画規模

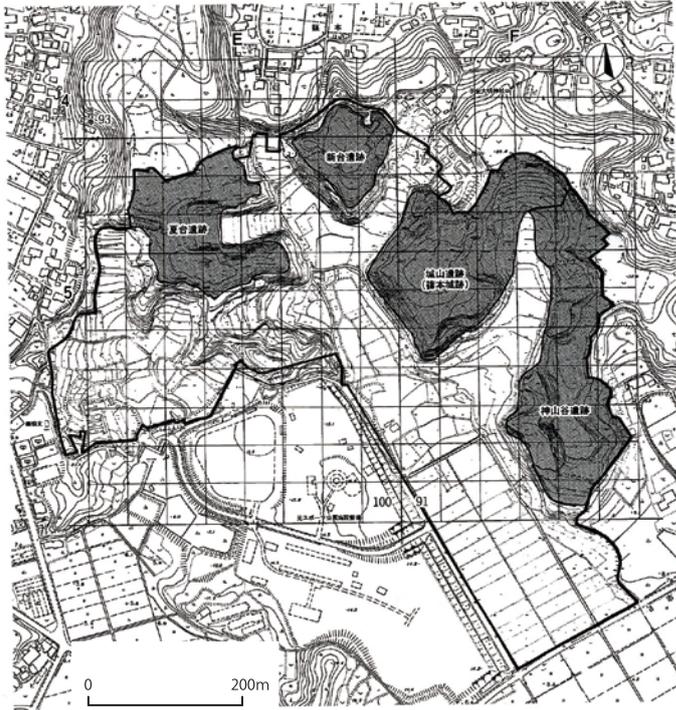
遺跡名	区画	規模 (m <sup>2</sup> )
篠本城跡	区画1	1080
	区画3	790
	区画4	685
	区画5	575
	区画6	370
	区画7	1130
	区画8	480
	区画9	1740
	区画10	890
	区画13	1035
	区画14	530
小菅天神II遺跡	北部区画	825
	南部区画	300
	南西部区画	225
伯父名台遺跡	第1整形区画	1040
	第2整形区画	370
	第3整形区画	292
大六天遺跡	I-c区	400
	I-d区	540
	I-e区	1250
	III区	360
宮ヶ瀬遺跡群No. 7	K1	570
	K5	450
	K7	280
	K8	280
宮ヶ瀬遺跡群No. 8		7200
宮ヶ瀬遺跡群No. 9		1545
墨黒沢遺跡	区画1	1129
	区画2	523
	区画3	658
上野古屋敷遺跡	①	750
	②	625
	③	780
	④	500
	⑤	1225
	⑥	1225
	⑦	1520
	⑧	800
	⑨	780
	⑩	500

※篠本城跡、伯父名台遺跡、墨黒沢遺跡は報告書データによる。それ以外は、報告書図面を基に筆者が算出した。上野古屋敷遺跡は中世建物跡が検出されている区画を抽出した。

総文化財センター 2002b) も篠本城跡と同時期の掘立柱建物跡の遺構が検出され、台地上及び台地斜面中位を削平した複数の居住区画がある(図5)。これらの遺跡群の範囲は南北およそ600m、東西約200mの広域にわたる。各遺跡の位置と年代から関連を有する規模の大きな集落と考えられる。

同じく台地上に立地する小菅天神台II遺跡(千葉県成田市)では、台地上を整形した区画で、北部、南部、南西部の3グループ程の掘立柱建物跡群が見られる(財団法人印旛郡市文化財センター 1998)(図6)。また伯父名台遺跡(千葉県千葉市)(財団法人千葉県文化財センター 2004)でも、台地上を部分的に削平し、溝を配置した3つの区画が並んでいる。また、それに連続する区画がもう1箇所存在したことが推定されている。大六天遺跡(千葉県香取市)も台地上に立地する13世紀後半に成立する集落で、台地上を削平した区画が8箇所あるが、このうち少なくとも4箇所掘立柱建物跡の柱穴が集中しており、小菅天神台II遺跡、伯父名台遺跡に類似した集落の様相が見て取れる(財団法人香取郡市文化財センター 1995)。新戸遺跡、篠本城跡及びその周辺の遺跡群に比べると屋敷地数は少ないが、それらも集村的な様相を呈している。小菅天神台II遺跡や伯父名台遺跡でもやや規模の大きな区画がある。小菅天神台II遺跡では、やや広い北部区画に他区画よりも大型の掘立柱建物跡があり、この集落の中心的な区画とみることがができる。また、伯父名台遺跡においても、やや広目の第1整形区画があつて、これが集落の中心であつた可能性がある。このように、小規模な集村では、住民の階層差は小さいが、それでもリーダー的な者の存在が窺える。

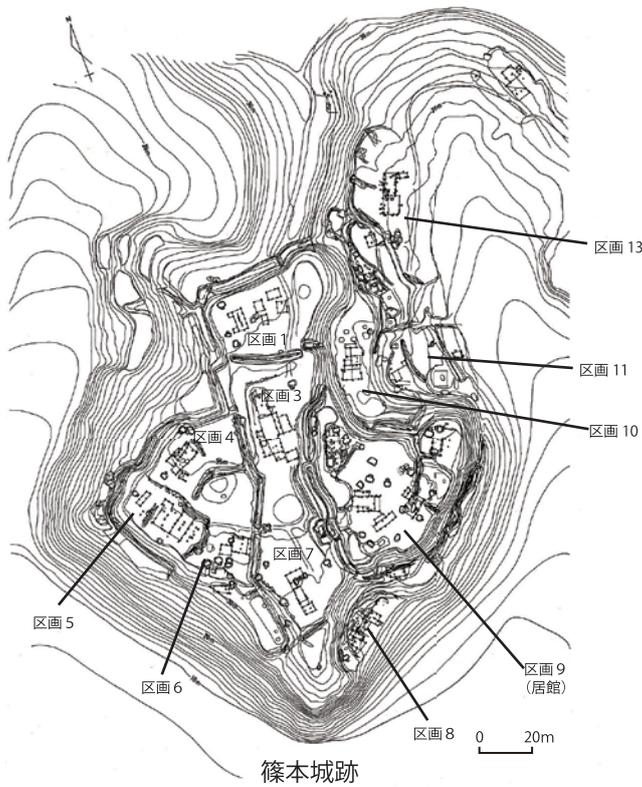
以上の分析の結果、13世紀から14世紀にかけては、集落規模及び集村する屋敷地の数に差異はあるものの、いずれの事例も屋敷地が集まる様相を示している。篠本城跡とその周辺集落のような、規模の大きな集合体は、屋敷地の数



篠本城跡及びその周辺の遺跡



神山谷遺跡



篠本城跡



新谷遺跡

図5 篠本城跡とその周辺

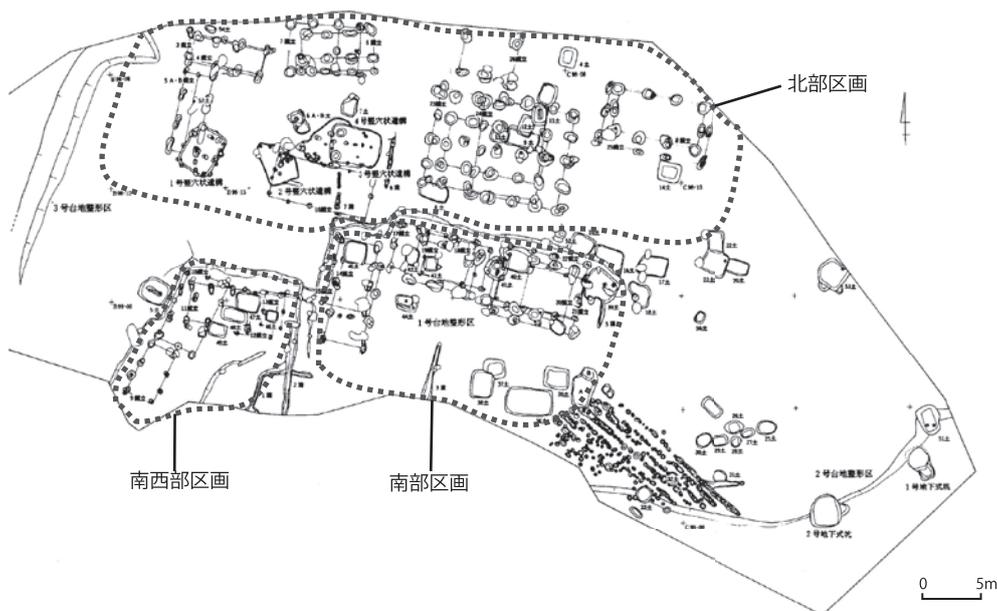


図6 小菅天神II遺跡

からみて、血縁的結合というレベルではなく、地縁的な結び付きと看做してよいだろう。ここでは、規模の大きな居館と考えられる区画を中心に複数の区画から成っており、この時期において居館を中核とする集村が進行していたことが分かる。

一方、小菅天神台II遺跡、伯父名台遺跡のような3～4程度の居住区画で構成される比較的小規模な集住集落もある。そこでは、中核的な区画はあるものの、建物規模に著しい差はなく(表1)、住民内に目立った階層差は見出せない。集村のあり方は、10前後の区画が纏まる集落と、3～4の区画が結合する集落が看取された。前者では、居館とも言える他より規模の大きい区画を有しており、村の有力者が中心となった集村と捉えられる(表2)。後者も、区画集合体としての規模は小さいながらも、集村の一形態としてみることができよう。この小規模な集村についても、やや大きい区画は、集落の有力者の屋敷地と考えられよう。

## 2. 15世紀後半に成立する集落

14世紀後半までに成立する集落のうち、伯父

名台遺跡、大六天遺跡、下植木壺町田遺跡等16世紀末まで存続するものもあるが、15世紀前半に廃絶するものが多い。

集落遺跡の消長(図2)からは15世紀後半に成立する集落が比較的目立ち、この時期に集落の再編があったことが看取される。15世紀後半に出現する集落では、宮ヶ瀬遺跡群(神奈川県清川村)、里字屋敷添遺跡群(埼玉県川口市)、上ノ町遺跡(神奈川県茅ヶ崎市)、上千葉遺跡(東京都葛飾区)等において居館と推定される区画を伴うものが多いのが特徴である。

宮ヶ瀬遺跡群は河岸段丘上に立地し、「表の屋敷」という伝承のあるNo.8遺跡は、90m×80mの方形居館が15世紀後半から16世紀代に構えられている(財団法人かながわ考古学財団1997b)<sup>4)</sup>。その北側と南側には掘立柱建物跡群の纏まり(No.7遺跡(財団法人かながわ考古学財団1997a)、No.9遺跡(神奈川県立埋蔵文化財センター1993))がある(図7)。No.8遺跡は、東・西・南面に堀があるが、南西隅は堀が繋がらず、途切れている。東側と南側は中央部が掘り残された土橋がある。居館南側のNo.7遺跡では、複数の建物跡群が検出されている。出土遺物の多くは、近世のもの

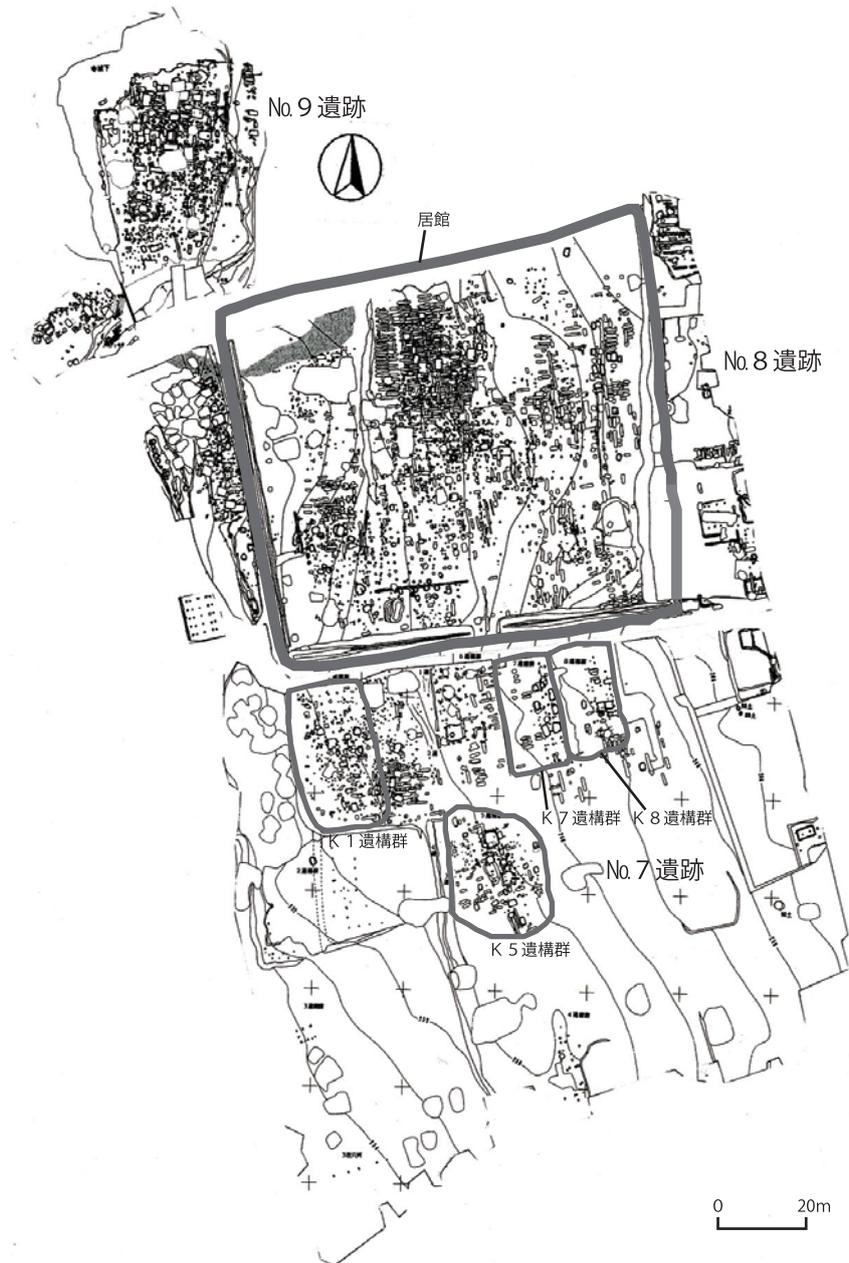


図7 宮ヶ瀬遺跡群

であるが、一部中世のものが含まれ、K1・5・7・8遺構群は15～16世紀に成立するとみられる。居館の成立と共に、近隣に農民層を集住させた集落を作り上げたことが推定される。これは、No. 8遺跡の居館が土橋によってNo. 7遺跡と繋がっており、K1・7・8遺構群は居館南側に接している様相からも窺える。居館北側のNo. 9遺跡でも、居館に接した場所で、15～16世紀代の三時期に亘る建物跡群が見つかった。

居館の南北にある屋敷地は、居館と共に成立したことが考えられる。まず、居館の主であるが、土豪クラスであろう。居館の南北の居地の居住者は、一般農民層と捉えておくのが妥当と考える。居館内では、18世紀代まで居住が続き、No. 7遺跡においても中世後期に成立した居住지가、18世紀代まで継続することと連動している。No. 7遺跡では、17世紀から18世紀に成立する屋敷地があり、それらは19世紀代まで継続している。

近世以降に新たな屋敷地が成立することが分かる。集落全体で中世後期と大きな変動はなく、この時期の集落が近世へと継続しており、近世集落の原型が、15世紀後半に成立することが窺える。

以上のように、居館と推される区画は、村の有力者の居地と考えられた。この階層は、小領主、侍、土豪等、種々の呼称がある。村落の上層階級として様々な役割を担い、村の利害を代表する存在とする視点が提示されている（長谷川2010）。この時期の集落に居館と推定される区画が多く認められるのも、それに関連している可能性が考えられる。宮ヶ瀬遺跡群No. 8遺跡では、

ほぼ一町四方に近い規模であったが、15世紀後半には、半町（約50m）四方の居館<sup>5)</sup>もある。こうした居館の規模の差は、居住者の階層あるいは経済力の差を反映したものであろう。居館の規模には集落によって差があるものの、居館は他の屋敷区画との規模差が明瞭であり、集落内の有力者であることを読み取ることができる。

一方、こうした集落と対照的なのが上野古屋敷遺跡（茨城県つくば市）（財団法人茨城県教育財団 2007、2009）である（図8）。各区画の規模をみるとは、宮ヶ瀬遺跡群のような集落内に突出した階層の居住者が見当たらない。土豪クラスの居住していない集落とみられる<sup>6)</sup>。上野古屋



図8 上野古屋敷遺跡

敷遺跡は、舌状台地上に立地し、集落南端の台地の付け根付近を幅2.4～4mの溝で区切っている。溝の深さは50～80cmで防衛的機能は考えられない。集落の外縁から居住地を画するものであろう。同じ台地上に立地する伯父名台遺跡等と比べ、集落全体をその外縁部から隔てる意識が高まっている様子が見て取れる。15世紀以前の集落に比べ、集落内居住者結合の強さの一端が知れる。

上野古屋敷遺跡に似た集落跡として墨古沢遺跡（千葉県酒々井町）がある。ここでは、15世紀末までに台地上に少なくとも3箇所の屋敷地が成立する。台地上を造成して屋敷地としている。これらは17世紀前葉まで継続している（財団法

人千葉県教育振興財団 2006）（図9）。各区画の規模は約30m×30m（区画1）、25m×20m（区画2）、50m×12～13m（区画3）で、区画1が他の区画より階層的にやや上位の上層農民とされている。区画1は中心的な区画であるが、区画2や3との差は、宮ヶ瀬遺跡群における居館とそれ以外の屋敷のような隔絶したものではない。区画1は台地斜面下の谷戸に通じる道に面している。谷戸では、おそらく水稲耕作が行われていたことが推定される。台地上に立地する集落遺跡で谷戸との往来路が確認されたことで、集落と耕地（水田）との繋がりが把握でき、その通路を押さえる場所に村内の有力農民が屋敷を構えていたことが知れる。この場所が、農耕を行う上で、集落内



図9 墨古沢遺跡

の要所であったのであろう。土豪・侍層の居た集落に比べ住民内の階層差はあまりないが、その中でも多少の経済的な格差があって、優位な者が集落内の良地を居地とすることができたことが窺える。

墨古沢遺跡には14世紀後半に成立し、15世紀後半までには廃絶する屋敷地（区画4）があり、集落自体は14世紀後半には成り立っている。区画4は調査範囲の西方まで広がっていること、また区画1～3も、それ以前の遺構を削平して造成している可能性があって、当該期の集落の様相は、はっきりしないが、14世紀後半からの集落が15世紀末葉までに再編されていることは明らかである。この現象は、上野古屋敷遺跡とは異なり、前代の集落と同じエリアで新たな集落が再形成されたことを示している。

このように、村落の成員から土豪主導型の集落と、それが在村しない集落の二相をみることができる。後者の場合、集落内の階層差が緩やかであり、前者に比べ共同体的性格がより明瞭な村と捉えられよう。

### 3. 15世紀代の集落再編の背景

15世紀代にそれ以前からの集落の多くが消滅する一方で、15世紀後半を中心とする時期に新たな集落が生まれてくる。その要因は何であったのであろうか。

集落遺跡では、上記のような二つの様相が見出せた。どちらも村落住民の結束によるものと推定される。これは、文献史学が明らかにした地下請（村請）、村掟・自検断、村の財産所有を可能にした自立的な村の成立ということに関連していよう。とりわけ、土豪・侍層の居住地と推定される居館的区画のある集落が目立っていることは、この時期の集落の特徴の一つとして指摘できる。宮ヶ瀬遺跡群の事例では、居館とその周囲の屋敷地の規模に大きな格差が生じており、土豪層が村落内で卓越した存在に成長していたことが窺える。このような集落の様相か

ら、村の指導的地位にいる者のもとに、百姓層が集まって一つの集落が形成されたことが考えられよう。

もう一つの問題として、15世紀前半までに消滅する集落も集村の様相が看取され、15世紀後半以降の集落との差異を考える必要がある。集落の姿としては、小菅天神台II遺跡のような小規模区画の小さな集まりから、篠本城跡と神山谷遺跡、新台遺跡等の大規模な屋敷地の集合体までみられたが、特に篠本城跡の中核的区画の存在は、14世紀後半から15世紀前半の段階で、土豪・侍層が村の指導者として確立した存在であったことを示唆するものである。これが、15世紀後半まで継続せず、その後は墓地化するのは、13世紀後半から15世紀前半の集落である頭塔遺跡（埼玉県本庄市 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1998）といった他の集落遺跡でも同様の傾向が見出せ、こうした消滅する集落遺跡からも、集落の再編ということが考えられる<sup>7)</sup>。すなわち、従前の居住地での集落の維持・継続の困難に直面した可能性がある。その原因も、上記の如き村落構造の変容にあらう。篠本城跡とその周囲から成る集村的集落は、相当規模のものである。それが15世紀後半以降まで維持できなかったところに、この集落がその時期に起こっていた自立的村の発生という在地社会の変質に対応できなかったことが表れていよう。

15世紀後半に出現する集落の中には、17世紀以降まで継続するものもあり、この時期近世村落の原型が出来つつあったことを示している。近世の村においては、一般農民層たる平百姓、さらにはその下層の小百姓層も一つの家を形成しており、小規模ながらも独立した経営体として成り立っていた。この経営体としての家は、15世紀後半に出てくる集落を考える上での重視すべき事象と考える。

池享氏は、この時期に一般農民層の小規模な自立的な経営体としての家が増加し、その成立要因として中世後期の集約的農業、灌漑整備等

による耕地安定化を挙げている。この階層は、無姓の百姓層に相当する。こうした経営体の増加は、土地境界や利害関係を巡る争いを引き起こし、その解決のため自治的組織として惣村が成立、上層農民であった土豪・侍層が、村落の自治的運営を主導したとする（池 2009、2012）。

また、農業の集約化と耕地の安定は、当時の気候環境に照らしてみれば、作物確保のために不可欠な課題であったとも言えよう。

考古学からみた集落遺跡の様相は、15世紀前半までと後半以降とは、溝あるいは台地上での削平による整形区画に大きな差異はないものの、集落の消長では、明瞭に変化が認められ、集落住人、とりわけ平百姓層の家の確立化という動きがこの現象を生じさせたと考えられる。

集落の全てが15世紀前半で消滅する訳ではなく、伯父名台遺跡や大六天遺跡の如く16世紀代まで継続する集落遺跡もあり、13世紀から14世紀代に成立した村が中世末まで続いたことを示している。このような集落では、居住地が移動することはなかった。村内部の屋敷地を敢えて再編する必要性がなかったのだろう。下植木壺町田遺跡では、居館と考えられる区画が中世後期まで認められ、村落内の有力者の求心力が維持されていたことが窺える。

そうした中で、集落の場所に変化のなかった墨古沢遺跡では、居住区画の廃絶と新設があって、集落内での再編が認められた。再編の有無は、遺構のみでは判断し難い面もある<sup>8)</sup>が、下植木壺町田遺跡の事例は居館の優位性が16世紀代まで続いてものであり、土豪層が村落内での一定の力を保持した場合、居住区画が変わるような大きな再編はなかったのであろう。こうしたケースでは、新たに成立した平百姓の家も既存の集落に取り込みつつ、集落が維持継続されていたことが考えられる。

#### 4. 村落社会構造の変質と地域社会へ与えた影響

これまで論じてきた集落の消長は、15世紀後半に集落の画期があることを示している。15世紀後半の関東は、鎌倉府体制の崩壊と永享の乱以後の戦国の動乱が始まる時期である。こうした社会の動揺は、社会の根底にある村の変化が起因している可能性がある。村落の変容は、領主であった国人領主層にも少なからぬ影響を及ぼしたのではないだろうか。村請の成立は、年貢納入等について農民個人々から、村が一括して納める形となったもので、村の組織的団体としての確立をみることができる。村請によって、村対領主の関係へと変わり、そこには個々の村落住民は出てこなくなる。そして、多発する地域紛争の中で、村自らがこれを戦いぬくだけでなく、領主の側にも領域内の村の平和維持や生業維持のために必要な勸農が求められた。領域支配の基盤となる村の変質は、国人領主層に地域支配に際して相応の危機意識をもたらしたのではないだろうか。国人領主間で相互関係維持、地域安定化が志向された結果、一揆が形成された要因の一つとして、このような村の内部変化を挙げてもよいだろう。

集落の再編は、それだけではなく、前記の如き気候変動に伴う環境変化、あるいは様々な物流も、在地社会を変えていった可能性がある。15世紀における集落の消滅と出現は、無姓の百姓層の家の成立、小規模な生業及び物流に適した土地への移住等が相まって生じたものと考えられる。

以上のように、在地の根本となる村人の自立化が、村落社会の構造変化をもたらし、それは領主層の地域支配の在り様にも変化を与えることになった可能性がある。

#### まとめ

本稿では、はじめに13世紀後半期から14世紀代に出てくる複数の屋敷地が一箇所に集合する

傾向から、この時期に関東でも集村が進行したことを確認した。これらの集落の多くは、15世紀代までは姿を消し、その後に新たな集落が成立している。このような動向から、15世紀代に集落の画期の一つを置くことができよう。15世紀代、とりわけその後半期に成立する集落は、居館と認識できる区画がある事例が多く、居館主がこの時期の村落の指導者的立場にいたと考えられる。この時期に成立する集落は、17世紀前葉までに解体してしまうものがある一方、宮ヶ瀬遺跡群や上千葉遺跡のように18世紀代から19世紀代まで継続するものもあり、考古学の視点からも中世後期の集落が近世集落の原型と捉えることができる。ただ、16世紀末から17世紀前葉に廃絶する集落もあり、これらの集落遺跡から、中世から近世の移行期にも、村落に変化のあった時期と見做すことができる<sup>9)</sup>。15世紀後半から16世紀代にかけての時期は、近世まで続く集落が生まれる一方で、近世初頭のうちに消滅する集落もあり、この時期の集落を近世村落の原型と一元的に捉えることは慎重でなければならない。

以上の考察では、15世紀後半を集落の再編と見做しうるもので、この画期を重視した。先学諸氏も、15世紀の中に画期設定しており、この時期が関東の中世後期の集落を考える上で重要であることは確かである。筆者は、それを平百姓層の家の確立に関連付けた。集落の消長からは、そのような捉え方ができた。冒頭に述べたように、分析すべき課題がまだ幾つかあり、今後は多角的な視点から検討していきたい。

## 注

- 1) 国あるいは郡レベルでの地域的研究は意味あるもので、それを否定するものではなく、その重要性は十分認める。特に、地形環境はそれぞれの地域によって違った状況にある。関東内部でも巨視的には、次のような違いがある。一つは海岸沿いや利根川や荒川、多摩川といった大規模な河川沿いの沖積地、二つは常総台地や武

蔵野台等の洪積台地や多摩丘陵の如き丘陵地帯、三つは関東北部、西部の山間部である。このように、それぞれの地形により、集落の立地条件も地域により異なることが考えられるが、本稿では各地域を越えた関東の共通的な現象としての集落様相を考えていきたい。

- 2) 本稿では、集落を人が暮らした区域とし、「村落」ないし「村」は集落を中核とし、その周囲の耕地、さらにその外周に広がる山野あるいは河海を含めた範囲と定義付けをしておく。
- 3) 一つの居住単位を「屋敷地」という用語で表現する。その理由としては、これまでの諸研究において、この用語が使われていることと、現時点で他に適切な用語が見当たらないためである。それから、文中で居住区画という言葉をする場合もあるが意味は同じである。
- 4) ここでは、14世紀代の遺物も散見され、15世紀後半以前に何等かの居住地があった可能性もあるが、果たして集落が形成されていたかは定かでない。少量の遺物からは、短期に人為的活動があったことを示唆するにすぎない。したがって、15世紀後半代になって居館を中核とした集落が成立したことが考えられる。
- 5) 池ノ尻館跡（千葉県四街道市 中野遺跡群調査団 1986）、宮廻館跡（埼玉県川越市 埼玉県埋蔵文化財調査事業団）等が、一辺半町程度の規模の方形居館で、これらは概ね15世紀後半に機能していた。これらの居館跡は、中世後期にこのような一辺半町ないしそれを下回る規模の居館が構えられるようになったことを示している。
- 6) 報告書（財団法人茨城県教育財団 2007、2009）では、土豪層を中心とする集落と指摘されている。その理由として、威信財となりうる鉄軸瓶子、青磁碗・皿・壺、白磁皿、天目碗等の遺物の出土、多数の区画溝が挙げられている。しかし、瓶子や壺等は威信財となりえても僅少であり、その他の器種は威信財とまで言い切れないように思われる。集落機能時の陶磁器全てが遺跡に残されていないだろうが、嗜好的な可能性がある遺物が僅少であり、陶磁器、土器の殆どは日常生活で使われてものであることから、当時の陶磁器や土器の使用状況がある程度反映されているように思われる。したがって、上野古屋敷遺跡の場合、出土遺物からは土豪層を直接に裏付ける物的根拠は低いと考える。また、居館を窺わせる突出した規模の区画が存在せず、このことから土豪層の存在を首肯しうる痕跡が見出せない。区画規模にはある程度の規模差があるが、これは居

住者内での有力者とそうでないものの違いが表れているものと理解したい。

- 7) 居住地であった所を墓地する行為自体意図的なもので、その場所に対する何等かの意識が作用していたことが推定される。このことの意味については、別途考えてみる必要がある。
- 8) このことについては、陶磁器や土器を中心とする、出土遺物による分析も今後必要と考えている。15世紀代の集落遺跡で、陶磁器・土器の組成や出土量に何らかの変化があるのか検討すべき課題である。
- 9) 16世紀末から17世紀前葉も、集落の画期と見做せよう。この時期の画期の要因としては、幕藩体制の成立が挙げられる。この新たな政権は、地域支配の単位として村を位置付け、その中で、中世後期の村落がそのまま継承された場合や、中世後期の村が幾つかの村に分かれる等、前代からの継承と変化が同時進行した時期とも言える。その中で16世紀末から17世紀前葉に消滅する集落は、別地への移住が推定される。例えば、上野古屋敷遺跡の台地下には現在の集落があり、その成立は近世と示唆され、上野古屋敷遺跡の住民移動が指摘されている（財団法人茨城県教育財団2007）。これは、居住移動による新村の成立をも含んだ現象と言えよう。画期の要因については、ここでは深く触れることは出来ないが、中世から近世への移行期の村落を考える上で重要な現象であり、今後の検討課題としておきたい。

## 参考文献

- 長谷川裕子  
2010 『中近世移行期における村の生存と土豪』校倉書房。
- 橋本久和  
1974 「中世村落の考古学的研究—高槻における二・三の遺跡調査から—」『大阪文化誌』第1巻第2号。
- 広瀬和雄  
1986 「中世村落の形成と展開—畿内を中心とした考古学的研究—」『物質文化』第50号。
- 市川正史  
1992 「中世から近世の集落」『かながわの考古学』2、神奈川県立埋蔵文化財センター。

- 池 享  
2009 『戦国大名と一揆』吉川弘文館。  
2012 『戦国期の地域社会と権力』吉川弘文館。
- 石田善人  
1963 「郷村制の形成」『岩波講座日本歴史』中世4。後に『中世村落と仏教』1996思文閣出版へ再録。
- 磯貝富士男  
1992 『中世の農業と気候—水田二毛作の展開—』吉川弘文館。
- 神奈川県立埋蔵文化財センター  
1988 『新戸遺跡』。  
1993 『宮ヶ瀬遺跡群III』。
- 勝俣鎮夫  
1985 「戦国時代の村落 和泉国入山田村・日野根村を中心に」『社会史研究』6。後に『戦国時代論』岩波書店へ再録。
- 黒田基樹  
2006 『百姓から見た戦国大名』。
- 中野遺跡調査事業団  
1986 『下総国四街道地域の遺跡調査報告書』。
- 大塚昌彦  
1994 「群馬県における中世集落の一形態」『群馬考古学手帳』4。
- 斎藤 弘・新藤敏夫  
1995 「北関東における中世集落遺跡について」『研究紀要』3、財団法人栃木県文化振興事業財団埋蔵文化財センター。
- 櫻井淳史  
2003 「県内における中世村落の発展について—百姓居宅の区画から—」『市原市文化財センター研究紀要』IV。
- 笹生 衛  
1999 「東国中世村落の景観変化と画期—西上総、周東・周西郡内の事例を中心に—」『千葉県史研究』第7号。
- 洪江芳浩  
2010 「多摩と江戸の村落景観—中近世移行期の変化を読み解く—」『中世はどう変わったか』高志書院。
- 築瀬裕一  
2006 「房総の中世集落—台地上集落を中心に—」『中世東国の世界2 南関東』高志書院。
- 財団法人千葉県文化財センター  
2004 『千葉東南部ニュータウン30』。
- 財団法人千葉県教育振興財団  
2006 『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵

文化財調査報告書3』。  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
1999 『下植木壺町田遺跡』。  
2008 『宮廻館跡II』。  
財団法人茨城県教育財団  
2007 『上野古屋敷遺跡』。  
2009 『上野古屋敷遺跡3』。  
財団法人印旛郡市文化財センター  
1998 『成田ビューカントリー倶楽部造成地内  
埋蔵文化財調査報告書(3)』。  
財団法人かながわ考古学財団  
1997a 『宮ヶ瀬遺跡群XI』。  
1997b 『宮ヶ瀬遺跡群XIII』。  
財団法人香取郡市文化財センター  
1995 『大六天遺跡』。  
財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団  
1998 『地神・塔頭』。  
財団法人東総文化財センター  
2000 『篠本城跡・城山遺跡』。  
2002a 『神山谷遺跡(2)』。  
2002b 『新台遺跡』。

## 図・表の出典

図1・図2 筆者作成  
図3 神奈川県立埋蔵文化財センター 1988に一部  
加筆  
図4 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団1999  
に一部加筆  
図5 財団法人東総文化財センター 2000・2002a・  
bに一部加筆  
図6 財団法人印旛郡市文化財センター 1998に一  
部加筆  
図7 神奈川県立埋蔵文化財センター 1993、財団  
法人かながわ考古学財団1997a・bに一部加筆  
図8 財団法人茨城県教育財団2009に一部加筆  
図9 財団法人千葉県教育振興財団2006に一部加筆  
表1・表2 筆者作成